

大学教員間の「さん」と「先生」の 呼称選択に影響する諸要因

Factors determining the usages of -san and -sensei among faculty in a Japanese university.

林 炫情 (山口県立大学)・玉岡 賀津雄 (名古屋大学)・宮岡 弥生 (広島経済大学)
LIM Hyunjung, TAMAOKA Katsuo, MIYAOKA Yayoi

要 旨

本研究では、大学教員間の呼称表現(「さん」・「先生」)の使用状況を探るために、対人コミュニケーションのあり方を決定づける「対話場面(1対1・会議・メール・学生の前)」、「親疎関係(親しい・親しくない)」、「力関係(年上・同年齢・年下)」、「話し手と聞き手の性差(同性・異性)」、「調査協力者属性(男女差・年齢など)」の5つの要因を設定し、呼称表現選択にそれぞれの要因がどのように影響しあっているのかを決定木分析を用いて検討した。その結果、すべての場面において、「さん」よりは「先生(〇〇先生)」で呼ぶことが多く、大学教員同士では相手を「先生(〇〇先生)」付けて呼ぶことが一般的であることが分かった。また、教員同士の「さん」使用は、「1対1」(139回, 22.7%) > 「メール」(78回, 13.0%) > 「会議・学生の前」(67回, 5.4%)の順に使用頻度が高く、「会議・学生の前」といった比較的フォーマルな場面や相手の立場への配慮が必要な場面では使用しにくいことが示唆された。女性教員の場合、「会議・学生の前」では相手を「さん」で呼ぶケースは見られなかった。さらに、決定木分析の結果、教員同士の「先生」と「さん」の使用選択には、「対話場面」の影響がもっとも強く、「親疎関係(親しい・親しくない)」、「力関係(年上・同年齢・年下)」、「調査協力者の男女差、年齢」の違いが、部分的に認められた。

1. はじめに

表現形式そのものが対人関係修辭の機能を持っている呼称表現の場合、自分および相手をどのようなことばで呼ぶかは、両者の間にどのような関係が成立しているかを表す指標となるだけに、どのような呼称を選択するかは円滑なコミュニケーションを営むうえで大切であるといえる。

一方、実際のコミュニケーションの場において、相互交渉における意味¹⁾を決める諸要因、つまり対人コミュニケーションのあり方を決定づける諸要因には、話題の人物との社会的関係、性別、場面などさまざまなものがあり、どのルールあるいは戦略を使ってボライトネスを表現するのが適切であるかについては、話し手と聞き手の属する文化や社会によって異なる²⁾。日韓の対人コミュニケーションの場面の呼称使用においても、話し手と聞き手の関係、そして場面などによって、また話し手の目的によって、多彩なバリエーションのなかから呼称を選択することができ、相手が同一人物であっても呼称表現の選択は決し

て一様でない。

本稿では、大学教員間の呼称使用、とりわけ教員同士の「さん」と「先生」がどのように使われているのか、またその使用に関わる諸要因の影響の度合いや要因同士の関連性を決定木分析を通して探ることを目的とする。

2. 研究方法

2.1 調査時期と調査協力者

2011年6月から7月にかけて、広島県と山口県の大学に勤める現職大学教員(非常勤講師は除く)を対象に、教員同士の呼称使用に関する質問紙調査を行った。回収した57名の回答のうち、無回答項目が多かった4名を除く、53名分を有効回答者として分析した。有効回答者53名の内訳を表1に示す。

2.2 質問紙とデータ加工

呼称使用は、相手との性差、親疎関係などの対人的要因やフォーマル・インフォーマル、メールなどといっ

表1. 調査協力者属性(性別、年齢、所属、職位、勤続年数)の内訳

調査協力者属性		人数	%
性別	女性	24	45.3
	男性	28	52.8
	無回答	1	1.9
年齢	20代	1	1.9
	30代	10	18.9
	40代	19	35.8
	50代	23	43.4
所属	文系	45	84.9
	理系	7	13.2
	無回答	1	1.9

調査協力者属性		人数	%
職位	教授	25	47.2
	准教授	21	39.6
	講師	5	9.4
	助教	1	1.9
	無回答	1	1.9
今の職場での勤続年数	5年以下	12	22.6
	5年以上10年以下	17	32.1
	10年以上	24	45.3

た場面的要因などによって言葉の使い分けが異なってくる事が予想される。そこで質問紙では、大学教員同士の呼称使用が測定できると予想される4つの対話場面を想定した。場面1は、「相手と1対1で話をする場合」、場面2は「会議での場合」、場面3は「メールの場合」、場面4は「学生の前での場合」である。次に、それぞれの4つの場面について、対人的要因として、①「親疎関係」は「親しい・親しくない」の2つ、②「力関係」は「年上・同年齢・年下」の3つ、③「話し手と聞き手との性差」は「異性・同性」の2つを設定した。そして、4場面のそれぞれの相手に対してどのように呼ぶかを質問した。呼称表現は、予備調査³⁾から得られた上位4位までの「先生(〇〇先生)」、「教授(〇〇教授)」、「〇〇さん」、「〇〇様」を選択肢にあげた。また、「その他」という自由記入の回答欄を設けて必要があれば記入するようにした。しかし、分析では、呼称の種類が複雑になるのを避けるため、回答がほとんどなかった「教授(〇〇教授)」、「〇〇様」、「その他」は分析から除外した(欠損値として扱う)。つまり、分析で用いた大学教員同士の呼称表現は「先生(〇〇先生)」と「〇〇さん」のみである。本稿の末尾に、質問紙の指示文と「相手と1対1で話をする」場面の質問項目を示す。

2.3 分析方法

本研究の目的は、大学教員間の呼称、とりわけ教員同士の「さん」と「先生」がどのように使い分けられているのか、またその使用に関わる諸要因の影響の度合いや要因同士の関連性を探ることにある。呼称使用に影響を及ぼす諸要因間の影響関係について階層的な分析を行った先行研究には、林・玉岡(2009)がある。林・玉岡(2009)では、SPSS15.0のClassification Trees (SPSS, 2006)の統計ソフトを使用した「決定木分析(decision tree)」を用いて、韓国人大学生の先輩に対する「親族名称」と「実名」の呼称使用の適切性判断に及ぼす諸要因の階層性を分析している⁴⁾。

「決定木分析」は、個々のケースを分類し、また複数の独立変数(説明変数)の値によって従属変数(目的変数)の値を予測する分析方法である。1つの従属変数(目的変数)を複数の独立変数(説明変数)から予測するとともに、その結果を予測力の強い順に独立変数(説明変数)を階層化して、樹形図(dendrogram)による分類モデルを作るため、言語の共起頻度や複数の要因の階層性を検討するのに有効な解析法であるといえる。決定木分析の言語研究における有用性については、玉岡(2006)に詳述されている。

本研究では、決定木分析の従属変数(目的変数)として、「さん」と「先生」の呼称表現を用意した。この使い分けのあり方を予測する独立変数(説明変数)としては、図1に示したように、「対話場面(1対1・

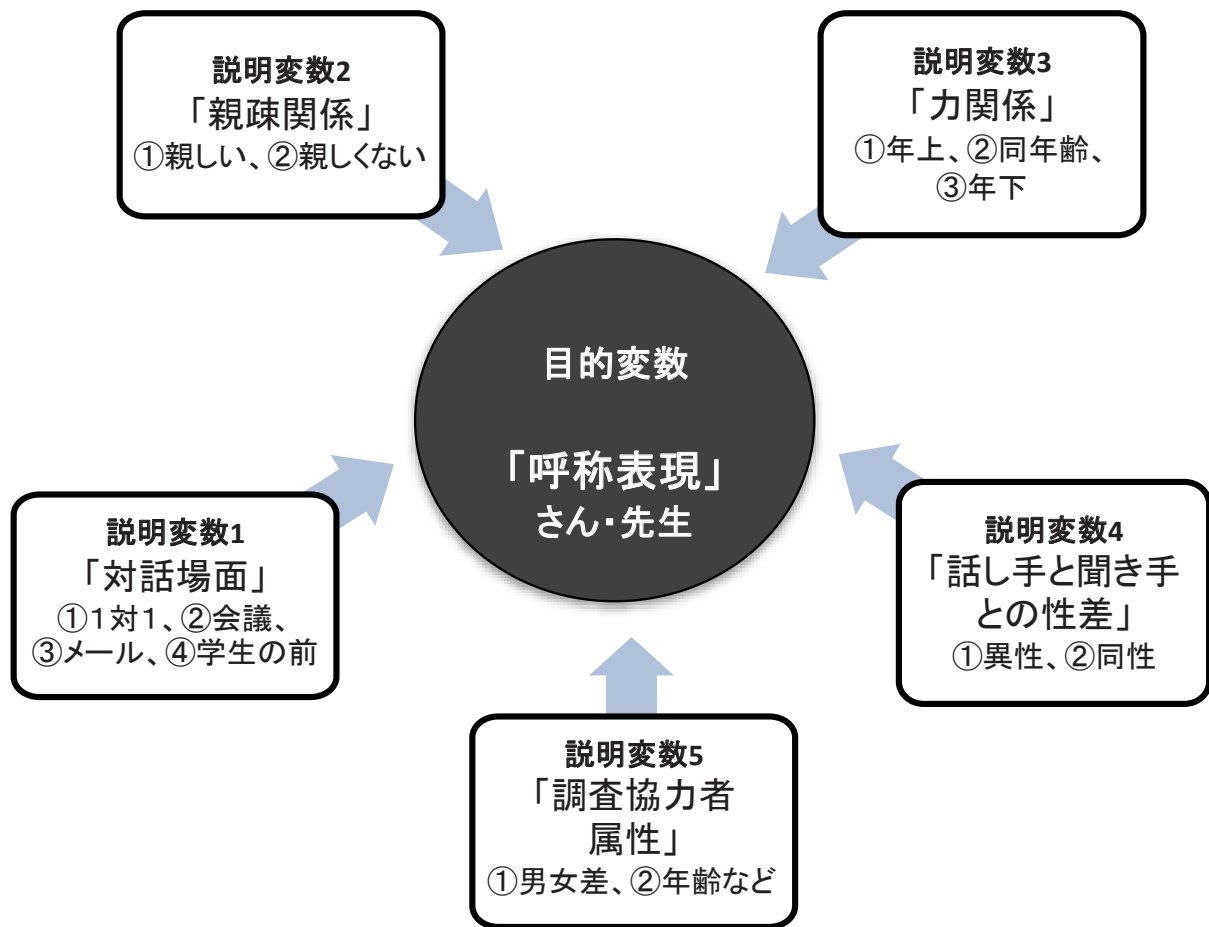


図1. 本研究の決定木分析における目的変数と説明変数

会議・メール・学生の前)、「親疎関係(親しい・親しくない)」、「力関係(年上・同年齢・年下)」、「話し手と聞き手との性差(同性・異性)」、「調査協力者属性(男女差・年齢など)」の5つの説明変数を設けた。

3. 大学教員同士の「さん」と「先生」の使用に関する決定木分析の結果

大学教員同士における「さん」と「先生」の使われ方に関して、「対話場面(1対1・会議・メール・学生の前)」、「親疎関係(親しい・親しくない)」、「力関係(年上・同年齢・年下)」、「話し手と聞き手との性差(同性・異性)」、「調査協力者属性(男女差・年齢など)」の5つの要因が影響する度合いを、決定木分析によって検討した。その結果、図2の樹形図(dendrogram)

が得られた。決定木の予測値は88.40%と高く、統計分析の信頼度はかなり高いことを示した。

「さん」と「先生」の使い分けを決めるもっとも影響の強い要因は、「対話場面」であった[$\chi^2(2) = 122.113, p < .0001$]。図2からも分かるように、呼称表現のノード0からノード1「1対1」、ノード2「会議・学生の前」、ノード3「メール」に枝が分かれている。これは「さん」と「先生」の使用パターンは、「対話場面」で大きく異なっていることを示している。会議と学生の前が同じノードに分類されているのは、これらの場面では「さん」と「先生」の選択に有意差がなく、同じ傾向を示したためである。全体としては、「さん」が284回(11.6%)で、「先生」が2,174回(88.4%)と大学教員同士では「先生」と呼び合うのが圧倒的に多いことが示された(ノード0)。「さん」の使用に

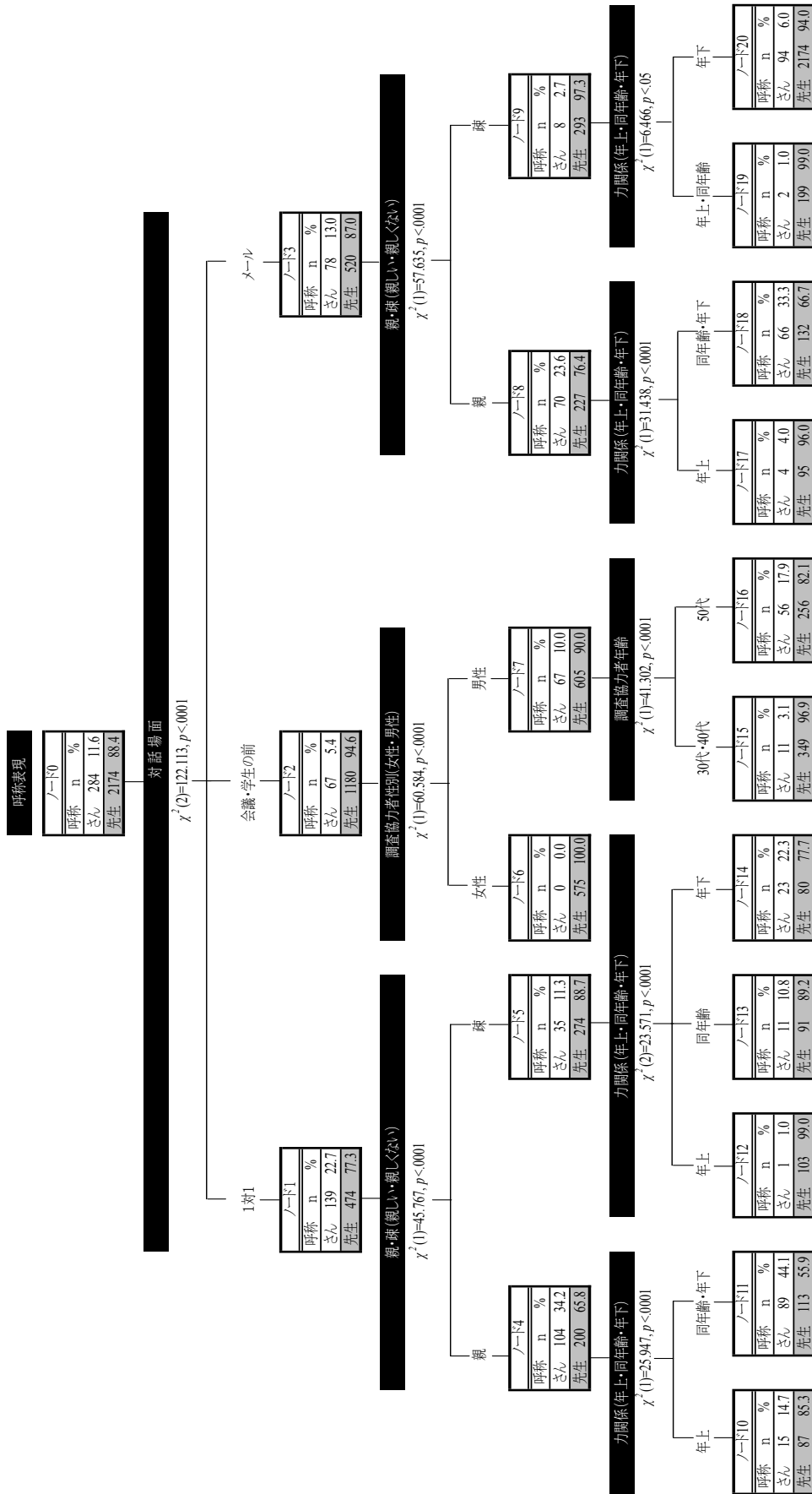


図2. 大学教員間の「さん」と「先生」の使用選択に関する決定木分析
 注: n は使用頻度を表す

については、1対1 (139回, 22.7%) >メール (78回, 13.0%) >会議・学生の前 (67回, 5.4%) の順に使用頻度が高くなった。以下では、上記の3の場面における「さん」の使用頻度に焦点を当て、「親疎関係 (親しい・親しくない)」、「力関係 (年上・同年齢・年下)」、「話し手と聞き手との性差 (同性・異性)」、「調査協力者属性 (男女差・年齢など)」などの下位にくる諸要因の影響関係を詳しく述べる。

まず、ノード1の「1対1」場面においては、親疎関係がその下位要因として影響しており、親しくない相手 (ノード5, 11.3%) に対してよりは、親しい相手 (ノード4, 34.2%) に対してより用いられるという有意な違いが示された [$\chi^2(1)=45.767, p<.0001$]。さらに、それぞれには年齢の上下がその下位要因として関わって、親しい間柄では、年上 (ノード10, 14.7%) <同年齢・年下 (ノード11, 44.1%) の順に「さん」の使用頻度が高くなることが示された [$\chi^2(1)=25.947, p<.0001$]。同年齢と年下が同じノードに分類されていることから、親しい間柄では同年齢に対して年下と同じく「さん」の使用が比較的に多用されていることがうかがえる。一方で、親しくない相手に対しては、年上 (ノード12, 1.0%) <同年齢 (ノード13, 10.8%) <年下順 (ノード14, 22.3%) の順に、「さん」の使用頻度が高くなることが示された [$\chi^2(2)=23.571, p<.0001$]。

次にノード2の「会議・学生の前」場面では、調査協力者の性差がもっとも強く影響していることが示された [$\chi^2(1)=23.571, p<.0001$]。会議・学生の前場面における「さん」の使用は全体的に少ないものの、男性 (ノード7, 10.0%) の場合は、「さん」の使用が見られているのに対し、女性の場合は全く見られなかった (ノード6, 0.0%)。また、男性の場合においては、調査協力者の年齢がさらに下位要因として影響しており、30代・40代の比較的若い人よりは、50代の人の方がより使用しているという有意差が示された [$\chi^2(1)=41.302, p<.0001$]。これは、「さん」が比較的に同等または年下に対して用いやすい傾向があることを反映していると思われる。

さらに、ノード3の「メール」場面では、まず親疎関係が強く影響し、あまり親しくない相手よりは (ノード9, 2.7%)、親しい相手に対して (ノード8, 23.6%) 用いられていることが示された [$\chi^2(1)=57.635, p<.0001$]。また、親疎関係の下位要因として、親しい間柄と親しくない間柄ともに相手の年齢が影響していたが、その傾向には若干違いがあることが示された。

具体的には、親しい間柄 (ノード8) では、年上 (ノード17, 4.0%) と同年齢・年下 (ノード18, 33.3%) に枝が分かれていることから、メール場面での「さん」の選択は、1対1場面と同様に、相手が同年齢か年下かで有意な違いはなく、相手の年齢が年上か否かがその使用を決める要因となっている [$\chi^2(1)=31.438, p<.0001$]。これに対し、親しくない間柄 (ノード9) では、年上・同年齢 (ノード19, 1.0%) と年下 (ノード20, 6.0%) に枝が分かれており、相手が年上か同年齢かは有意な違いではないことを示していた [$\chi^2(1)=6.466, p<.05$]。既述した1対1場面では、親しくない間柄の下位要因として年上、同年齢、年下の3つに枝が分かっていたことを考慮すると、書き言葉のメールでは、親しくない同年齢の相手は年上と同等な待遇をする傾向にあるといえよう。

4. まとめ

本研究では、大学教員間の呼称表現(「さん」・「先生」)の使用状況を探るために、対人コミュニケーションのあり方を決定づける「対話場面 (1対1・会議・メール・学生の前)」、「親疎関係 (親しい・親しくない)」、「力関係 (年上・同年齢・年下)」、「話し手と聞き手との性差 (同性・異性)」、「調査協力者属性 (男女差・年齢など)」の5つの説明要因を設定し、それぞれの要因がどのように影響しあっているのかを決定木分析を用いて検討した。本研究の結果は、以下の3つに要約できよう。

第1に、対話場面によって使用比率には違いがあるものの、すべての場面で「さん」よりは「先生 (○○先生)」で呼ぶことが多く、大学教員同士では相手を「先生 (○○先生)」と呼ぶことが一般的であるといえよう。

第2に、場面ごとの「さん」の使用に注目した場合、1対1 (139回, 22.7%) >メール (78回, 13.0%) >会議・学生の前 (67回, 5.4%) の順に使用頻度が高く、会議・学生の前といった比較的フォーマルな場面や相手の立場への配慮が必要な場面では使用しにくいことが示唆された。女性教員の場合、会議・学生の前では相手を「さん」付けで呼ぶケースは見られなかった。「さん」の使用頻度をもっとも高かった場面は、1対1の状況で親しい同年齢や年下の教員を呼ぶ場合であった (44.1%)。その次は、メール場面の親しい同年齢や年下 (33.3%)、1対1場面のあまり親しくない年下 (22.3%) の順であった。このことから、対話場面によって違いはあるものの、「さん」は自分と同等または年

下に対して比較的に多用される傾向があることが分かる。

第3に、教員同士の「先生」と「さん」の選択に関わる要因間の関連性では、「対話場面」の影響がもっとも強く、その次に、「親疎関係(親しい・親しくない)」、「力関係(年上・同年齢・年下)」、「調査協力者の属性(男女差、年齢)」の違いが、部分的に認められた。これに対し、「話し手と聞き手との性差(同性・異性)」の影響は見られなかった。

対人コミュニケーションにおける発話の語用論的分析の主要な目的は、考えられる複数の要因がどのように働くかを知ることであるといえる。本研究で示したように、決定木分析はある言語行動がどのようにして決まるのか、そのプロセスを樹形図によって視覚的に把握することができるため、要因の階層的分析を行ううえで大変有用である。決定木分析の語用論研究へのさらなる応用が期待される。

注

- 1) 「意味」とは、ことばの中にのみ存在するものではなく、また話者のみ、あるいは聞き手のみが持っているものではない。話し手と聞き手の間の、発話の(物理的、社会的、言語的)文脈とその発話の選択可能な意味の間の、意味の取り決めに関わるダイナミックな過程である(Thomas, 1995; 浅羽監訳, 1998)。
- 2) Griceは、コミュニケーションにおいて、協調するとは、今会話している話題に関係があることについて(関係の公理)、真実だと思っていることを(質の公理)、聞き手の必要とする情報に見合った分だけ(量の公理)、分かりやすく(様態の公理)話すことである(Grice, 1975; 清塚訳, 1998)と述べている。一方話し手は、しばしば効率のよい話し方、すなわちGrice(1975)の協調の原理に即した話し方から逸脱する場合があるが、その動機は対人配慮(ポライトネス)にあると考えられる(清水, 2009)。つまり、協調の原理は言語伝達を明確に行うための原則であり、ポライトネス(politeness)の原則は言語伝達を円滑に行うための原則であるといえる。
- 3) 現職の大学教員3名に対し、職場での呼称使用に関する予備調査を行った。回答はすべて自由記入式で複数回答を行った。その結果、教員同士の呼称の場合、「先生(〇〇先生)」「〇〇さん」「〇〇ちゃん」「教授(〇〇教授)」「〇〇様」「ニックネー

ム」「あだな」などの使用が見られた。

- 4) 林・玉岡(2009)の決定木分析では、韓国人大学生の場合、全体的に先輩に対しては親族名称を用いるのが適切であり、実名を用いるのは適切でない判断する傾向が強いことが分かった。また、「親族名称」の使用には親疎関係(親しいか・親しくないか)がもっとも強く影響し、その次に話し手の性差(男性・女性)が影響をしていた。一方「実名」使用には、場面(授業中・雑談)の違いが最も強く影響し、次に親疎関係が強く影響することが明らかになった。このことから、韓国人大学生の先輩に対する「親族名称」使用は相手との距離を縮めるための呼称として、「実名」はインフォーマルな場面よりはフォーマルな場面でより相手と距離をおくための呼称として用いられていることが示唆された。

参考文献

- Grice, p. (1975). *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA.: Harvard University Press. (清塚邦彦訳, 1998, 『論理と会話』 東京: 勁草書房)
- 林炫情・玉岡賀津雄(2009)「韓国人大学の先輩に対する「親族名称」と「実名」の使用に関する適切度を決める諸要因」『ことばの科学』22, 137-149.
- 清水崇文(2009)『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』東京: スリーエーネットワーク
- 玉岡賀津雄(2006)「決定木」分析によるコーパス研究の可能性: 副詞と共起する接続助詞「から」「ので」「のに」の文中・文末表現を例に」『自然言語処理』13(2). 169-179.
- Thomas, J. (1995) *Meaning in interaction: An Introduction to pragmatics*. London: Longman. (浅羽亮一監訳, 1998, 『語用論入門: 話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』 東京: 研究社)

<質問紙の提示文と「相手と1対1で話をする」場面の質問項目一覧>

I. まず、3つの場面（【場面1：1対1】、【場面2：会議】、【場面3：メール】、【場面4：学生の前】）についてお尋ねします。あなただったら、以下のような状況でどのように相手呼びますか。最も近いと思うものを、5つの中から1つだけ選び、□の中にチェック (☑) してください。○○は相手の名前をつけて呼ぶことを意味します。

【場面1】相手と1対1で話をする場合(①-⑫)

- ①相手が日頃よく話をする年上の異性の大学教員の場合
1. 先生 (○○先生) 2. 教授 (○○教授)
3. ○○さん 4. ○○様 5. その他()
- ②相手が日頃よく話をする年上の同性の大学教員の場合
1. 先生 (○○先生) 2. 教授 (○○教授)
3. ○○さん 4. ○○様 5. その他()
- ③相手が日頃あまり話したことがない年上の異性の大学教員の場合
1. 先生 (○○先生) 2. 教授 (○○教授)
3. ○○さん 4. ○○様 5. その他()
- ④相手が日頃あまり話したことがない年上の同性の大学教員の場合
1. 先生 (○○先生) 2. 教授 (○○教授)
3. ○○さん 4. ○○様 5. その他()
- ⑤相手が日頃よく話をする同年齢の異性の大学教員の場合
1. 先生 (○○先生) 2. 教授 (○○教授)
3. ○○さん 4. ○○様 5. その他()
- ⑥相手が日頃よく話をする同年齢の同性の大学教員の場合
1. 先生 (○○先生) 2. 教授 (○○教授)
3. ○○さん 4. ○○様 5. その他()
- ⑦相手が日頃あまり話したことがない同年齢の異性の大学教員の場合
1. 先生 (○○先生) 2. 教授 (○○教授)
3. ○○さん 4. ○○様 5. その他()
- ⑧相手が日頃あまり話したことがない同年齢の同性の大学教員の場合
1. 先生 (○○先生) 2. 教授 (○○教授)
3. ○○さん 4. ○○様 5. その他()
- ⑨相手が日頃よく話をする年下の異性の大学教員の場合
1. 先生 (○○先生) 2. 教授 (○○教授)
3. ○○さん 4. ○○様 5. その他()
- ⑩相手が日頃よく話をする年下の同性の大学教員の場合
1. 先生 (○○先生) 2. 教授 (○○教授)
3. ○○さん 4. ○○様 5. その他()
- ⑪相手が日頃あまり話したことがない年下の異性の大学教員の場合
1. 先生 (○○先生) 2. 教授 (○○教授)
3. ○○さん 4. ○○様 5. その他()
- ⑫相手が日頃あまり話したことがない年下の同性の大学教員の場合
1. 先生 (○○先生) 2. 教授 (○○教授)
3. ○○さん 4. ○○様 5. その他()